

《資料紹介》

光永畛春氏関係資料について

湯川 洋史

1 はじめに

本稿では令和 5 年（2023）に寄贈された光永畛春氏関係資料についての概略を紹介する。光永畛春氏は久木野村の出身で、溝上器の開発を通して、熊本の農機具メーカー東洋社へ就職。のちヤンマーディーゼル、ヤンマー農機に勤めた。光永氏の来歴等については当館元学芸員（現別府大学准教授）福西大輔氏の論考に詳しい¹からここで詳しくは取り上げない。

光永氏からは最初期に開発した「光永式溝上器」がすでに寄贈されている²。本稿で紹介する関係資料は、光永式溝上器の注文請書や広告といった光永氏の手元にあった農機具開発関係の資料である。量としてはわずかではあるが、農機具開発関係の農機具以外の資料をあわせて見ることで初めて分かることもあるだろうから、今回紹介する次第である。

2 関係資料について

今回寄贈された資料は光永式溝上器の宣伝用チラシとその注文請書、イ草ハーベスター開発にかかる資料の一部である。

(1) 宣伝用チラシ

光永式溝上器は光永氏が 26 歳のときに制作した農機具である。当時の新聞には「水陸兼用の溝上機を完成／水稻培土栽培に最適／テストでも『優秀、の折紙』との見出しががついてる。20 歳から研究をはじめ、お



画像-1 光永式溝上機宣伝用チラシ

およそ 6 年をかけて完成させた溝上器は福西氏が紹介しているように、光永氏が東洋社に入社し、農機具の技術者として生きていく道を切り開いたものであった。

この溝上器を持って光永氏は県内 6 か所の農業試験場を巡り、試験と実演を行ったが、このとき持参したものが画像-1 の宣伝用チラシである。本チラシは当時の熊本日日新聞社編集長による好意で 300 部ほど作られたものだという。当時はまだ東洋社へ勤める前だったから、熊本市本山町泰平橋通りの安藤ラミー製作所を取次所として受注制作販売を行っていた。

掲載内容を一部書き出すと、品名は「革新型 光永式 水陸両用引型溝上機 七号機」とあり、用途として「1. 水稻二条植え培土栽培／2. 水田簡易整地麦栽培畦立／3. 芋類・蔬菜・煙草・玉蜀黍・菜種等の畦立及び培土／其の他各種作物の作条畦立及び培土」と記載されている。さらに特徴と性能として「一、本機は作業強度を軽くする為引型とする。／二、水・陸両用なるが故に山型犁先を有し土を両方に分等する為め土切り刃を利用（取替自由）／三、底部に舟型底播を使用し機体の安定と滑りを良くする。／四、二枚の培土翼を有し両方に土を押し開け羽尻

巾七寸一一尺四寸迄の広狭調節自由／五、水田（湿田、砂田）畑地の場合又作業者の身長に適宜応じて深淺を自由に調節する事が出来る。／六、能力として水田の場合一日の能率二反～三反（畑地は此れに限らず）／七、取り持自由に成る様又誰にでも自由に組立分解する事が出来る／以上取扱其他調節が自由で軽便で有る」と説明されている。

ほか試験結果のデータなども示されており、光永式溝上器に関する情報のほかに当時の農機具販売の様子についてもうかがうことが出来る資料と言える。

（２） 注文請書

本資料は溝上器の販売の際に使用されたものである。横半帳サイズの既製品で、「ブンセイ印 注文請書」とある。画像-2のように表紙に「光永式水陸兼用引型溝上機 各種作條培土/第七号機 考案制作元」とある印が押されている。

中には注文控えが6件ほど記載されている。以下、中身を見てみる。小国町農業協同組合が昭和30年6月24日に4台購入している。価格は1台2,400円である。摘要欄に「小売価格2,700」とあることから、同組合が4台まとめて購入し、その後組合員に

販売したようである。2件目は同年6月27日に産山村農業協同組合で5台を購入している。こちらでも1台2,400円とある。3件目は同年7月23日に個人（農業普及員）に2台販売しており、こちらは単価が1,750円である。4件目は再び小国町農業協同組合が4台購入しているが、こちらは単価が1,750円となっている。続く5件目は千田農業協同組合へ6台、単価1,750円にて販売し、6件目は個人に10台を同様の単価で販売している。

6月販売分と7月販売分でそれぞれ単価が2,400円と1,750円との相違がある。この詳しい理由は分からないが、6月分と7月分で異なるのは溝上器の受け渡し場所が異なる点である。価格の下がる7月分は工場渡となっている点にある。そのため、運搬費を除いた分が単価に反映されているのかと推測される。販売圏としては阿蘇周辺で、それを拡大するためにも取次所の設置と県内農業試験場周りなどを行ったものと思われるが、結果はついてこなかったようである。

このようにして、光永氏自身が販売と制作を受け持っていたが、ご自身の言葉によればあまり売れ行きは良くなく、その販路と制作について相談すべく訪れたのが、東洋社だった。この東洋社訪問によって、当時の社長から社員になるよう勧められ光永氏の農機具メーカー社員としての人生がはじまったのである。溝上器はそうした意味で、光永氏の人生を左右するものとなったといえる。

（３） イ草ハーベスター等開発関係資料

昭和31年（1956）3月に東洋社に採用された光永氏は熊本ではなく、大阪本社の技



画像-2 注文請書

術開発部門に配属された。そこではカルチベーター、テラー、トラクターなどの開発に携わったという。大阪では約9年間勤め、昭和40年（1965）2月に熊本支社の技術開発部門に転属となった。

この熊本支社で開発に取り組んだのが、イ草ハーベスターである。昭和43年には熊本県のイ草栽培面積は岡山県を抜いて、3,880haと全国一となった。当時のイ草栽培では刈り取りとスグリ選別作業に重労働で、かつ多くの労働力を必要とするものであった。そうしたイ草の刈り取り、スグリ選別、結束放出といった一連の作業を1台で行うことを可能にし、省力化と生産性向上に資したのが、光永氏が開発に携わったイ草ハーベスターである。

イ草ハーベスターの実機そのものについては、現在当館には収蔵されておらず、今回の寄贈資料にもない。関係資料としては画像-3のような写真が主たるものではあるが、あわせて当時のことを回顧した自筆メモなどもあるので、その内容の一部を紹介する。光永氏によると、「開発当時熊本市内から八代の鏡町、郡築、千丁等3年間通い試験等に奔走してました。イ草試験場の先生方の御意見も頂き鏡町の農家の交流もありました（中略）上熊本国鉄近くに、田圃20



画像-3 開発関係写真

αハウスの試験田を作り」開発に勤しんでいたとのことである。

現地での調査は「い草栽培作業時期参考資料」という1枚もの資料を見ると、その丁寧さがよく分かる。植え付け⇒成育⇒管理⇒収穫という4つの工程で記載され、それぞれ細かな数値まで書き込まれている。植え付けは品種、苗のサイズ、株数まで書き込まれ、成育では月別の草丈、茎数、水管理の方法、管理では網杭打ちや網張り、収穫では網を外す際の取り方の注意書きといった点なども記載されている。数値が細かなものであるのは開発に必要なものであるだけに当然ともいえるが、網外しの動作といった実際の作業上の記載は、そうした作業を実感として理解し、その上で効率を考えて機械へ反映させていく過程がうかがえるものと言える。これは光永氏のメモに「夏の暑い時期に腰の痛い作業でした」という一文があることから、まさにそのつらさを実感しながら開発が進められたことが想像できる。完成した「日の本 い草ハーベスター」は、分草・引き起こし・刈取り・搬送スグリ選別・結束放出というイ草収穫工程の5校手作業を一括一台で行えるものであった。これにより、イ草栽培における重労働の工程が大幅な省力化がなされたのである。

このほか資料としてはタバコ栽培やトマトにおけるマルチプランター開発時のフィルムカット植え実験、タバコの残幹抜根実験などの記録画像がある。どれも光永氏が開発に携わった農機具である。

3 おわりに

光永氏は東洋社熊本支社に約16年、東洋社には計25年勤められ、熊本支社の工場閉

鎖に伴いヤンマーディーゼルへ転職した。のち、昭和 62 年に定年退職され、現在に至っている。本資料寄贈にあたって直接お会いする機会は得たが、詳細な聞き取りは難しい状況だった。当館への資料寄贈は自身が開発に携わったイ草ハーベスターが現役で使われながらも、修理などに対応できないような状況が発生しつつあるとの報道に触れたからであった。幼少のころからものづくりが好きで、それを生涯の仕事とした光永氏は、途切れる記憶の中で、仕事は趣味のようなものであったとしきりにお話しされた。お会いする前に作成してくださっていたメモにも「入社して定年退職まで無事に勤め終り、イ草刈取り収穫機ハーベスターも世界初という評価を戴き完成、実用化を見る事が出来て私の人生で外ありません」と書かれている。

光永氏個人の生を振り返るとき、そこに仕事の占める割合はとても大きいものであった。私たちが暮らす上でなければならぬもののひとつが仕事である。ゆえに私たちは仕事によってある意味で規程されている。この仕事というものに対する価値観やあり方が揺らいでいるのが現代である。

八代平野では現在もイ草が栽培されている。これらを見て記録するとき、栽培法やそこに見られる価値観、身体操作技術といったものだけでなく、機械とその機械を作り出した人たちの交流と交渉を仕事として記録するのは私たち博物館を除いてはいないのだろう。時代によって揺れ動く、その感情も記録できるよう努めていきたい。

注

- 1 福西大輔「「肥後犁」以後の事—熊本の農機具メーカーの盛衰を通して—」『民具研究』151 号、2014 年 pp.64 - 66。
- 2 寄贈年は 2014 年。ご本人から湯川が聞いたところによると、久木野村の農家の納屋にあったものを光永氏が引き取り、解体・整備後、きれいに磨き上げた後で組み上げて、その後当館へ寄贈された。その際、一部パーツを交換したようで、開発・販売当時とは少し異なっている点には注意が必要である。